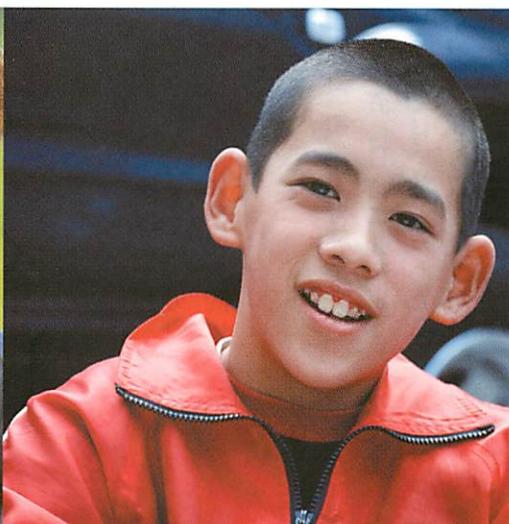


# メンズ”

# あしあう

2  
第二号



寄稿／『観経』にみる女のすくい男のすくい〈巻頭エッセイ〉立野 義正

特集／男と女のハーモニー〈対談〉近藤 龍磨 × 河野 教明

報告1／男女両性で形づくる教団をめざす協議会

報告2／厚生労働大臣の発言に対する要望書の提出について

エッセイ 女のささやき 秦 加奈弥 男のつぶやき 新羅 尚史

# 『観経』にみる 女のすくい 男のすくい

「『観経』にみる女のすくい・男のすくい」というテーマには何が問いかけられているのだろう。自分に改めて問いがおこる。

まず『観経』（『観無量寿経』）という語がいつも率直に日常に顔を出してくるということは一体どうしたとか。全くの驚きである。観経が日常化したのか、日常が観経化したのか、観経がどのように心得られているのか、日常がなんと心得ているのか、出合い頭の正面衝突か、このテーマにびつくり仰天!!しかし、よくよく思いめぐらしてみると、同朋会運動45周年（流罪800年）という時間の歴史が私どもの生活の根底に浸透している証かと、一種の感動を覚える。今日まで経典（浄土三部経）は年忌法要の際、坊さんが仏前で読経され

るもの、又は大学等で講義されるもので、全く私どもに無関係と思いついてきたのが、同朋会運動にかかわりはじめて自ら手にし、自分の生きざまが照らし出され、問い直され、仏さまの説法であったのかと、はじめて受けとめられた。それ以来、『観経』が『現代の聖典』として私どもの日常生活の中に解放され、仏陀の教化の場を生きる自分となってきた。所謂世間にどっぷり漬かり自分を見失っていたことに気づきはじめたことは未曾有のことでないか。生活に新しい生気がとり戻されたのかと直感し、深い感動を覚えた。

日常生活、所謂世間に流されて、自分の独自性に目覚めることなく、自分は世間に流されたまま、ああでもない、こうでもないと生きている。いわば、自分を第三者（三人称）、彼・彼女存在と見なし、そのことになんの不審もおこらない。あなた・わたしという二人称、顔が見える出合い、対話を失い、独り語に終る空しさに気づいているだろうか。人間が（自分が）第三者（三人称）としてしか扱われていない、扱っている現代社会、人材という語の乱発、それを放任している社会、わたし。少子化時代にあって、女性が子を産むもの、視している差別語が飛び出す社会、陳謝して済んでいく社会か。人は精子と卵子の結合により新しい細胞が生成され、分裂増殖され胎児となり、時満



たつの よしまさ  
**立野 義正**  
（高岡教区 西岸寺 前任職  
元教学研究所属託研究員）

ちて（或いは調節して）出産、爾来、細胞の新陳代謝で生長していくという現代人間観。その中でも一種のアーレギー体質、或いは拒否反応をおこすこの身、独自の主体的存在、自分の足で歩き、自分の眼で見、自分の身体の触覚で生きる、代理のきかない私の人生を生きる独尊者、覚存識。この一人称のわたし自身に、各自それぞれ目覚め、あなた・わたしの交わりを生きるという歴史社会が親鸞聖人によつてこの地上に顕かにされようとしている。己にこのような課題が仏陀の教えとして伝承されていたのである。

若し父無くんば能生の因即ち闕けなん。若し母無くんば所生の縁即ち乖きなん。若し二人俱に無くんば、託生の地を失わん。要すすべからく父母の縁具してまさに受身の処有るべし。既に身を受けんと欲するに、自の業識を以て内因と為し、父母の精血を以て外縁と為す。因縁和合するが故にこの身あり。（『観經四帖疏』序分義・散善顕行縁）

精子と卵子の結合には違いないが、精子はこの男性、しかもこの夫、この父親という重々無尽の縁による。卵子も同様、その父母にもそれぞれ父母ありという。まさに重々無尽の

因となり縁となり、相和合なくしてこの私は在りえないという感覚。「一億の人に一億の母あれど、わが母にまさる母ありなんや（山上憶良）」と歌われるわが母、との出遇いによるこの私、人と生れた感動が「受け難しこの人身」と自然にわきおこる心情であろう。たとどのような人生であろうとも事実そのものは重々無尽の縁生の世界である。

更に父母を縁としてあるその因は何なのか。私自身、自の業識生れる子自体・心・識・知覚体という、精子と卵子がくつついて子宮に受胎したには違いないが、生れるべき子自身に己に生れ出ようというはたらき、心はその縁を獲得して生れるのだ。現代の科学知識では説明がつかない。無始の過去という量り知れない経験の積累体という意味を業という。生れてくるにあたり、母だけが努力して生れてくるように思っているが、生れてくるもの自身が努力するのだ。胎内にあつて生れ出ようと渾身の力をふりしぼつて生れてくる。その力が弱いと生れてこれない。たとい病身であつても生れたいのだ。

何故そうしてまで生れたかったのであろうか。何を欲しがっているのだろうか。誕生後の自分の考え、知識で察知できる性質ではない。憶い出そうとしても憶い出せない無限の過

去を背負うと、今生きているこの私。自分の知識では分らない。分らないとは暗いのだ。暗いというのは私の知識では全く及ばない底知れない深遠広大な世界を生きてきたことを意味しているのだ。

本当に解からないのかというと、無意識に解かっている。本能が知っている。私の知識（人知）では解からない本能の世界を知り尽くしている仏智、一切智人。私のことを知り尽くして一塵の暗さもない、その世界に呼びさまされてはじめて、眞実の世界を生きる。こうした課題をもつと、生れ、生きていくといえよう。このような仏の眼差しをうけて在る如来内存在であるという。古老から「どんな不幸に出合うてもよいから、大悲応化された人間界、仏陀の教化される世へ生れさせてほしい、それを願いつづけ、あらゆる功德を積み、精一杯の努力をして生れてきたのだよ」と聞いたことがある。何か私の気づけない心情が言いあてられているかに思われる。念仏申す時に、私どもは男・女という交わりが『観經』という仏陀の教化土に身をうけて改めて問われ、善男子、善女人相互の交わりに転成されることが促されている存在でなかったのか。このわたし。あなた。

こんどうたつまる こんの のりあき  
〈対談〉 近藤龍磨 (岐阜教区) × 河野教明 (山陽教区)

# 特集 “男”と“女”のハーモニー

女性が住職・僧侶として法要などに参加する機会がふえてきています。しかし、男性と女性の声域の違いなど、初めてそこに加わった女性たちが戸惑う場面も出ています。そのようななか、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向け、僧侶と門徒が共に参加できる法要の具体化の一つとして「同朋唱和推進事業」が提唱されています。そこで今回、住職として、また音楽活動などをおして活躍されている近藤龍磨さんと河野教明さんのお二人を招いて、大谷派の儀式や声明しょうみょうというところに視点を当てて男と女の問題を考えてみたいと思います。

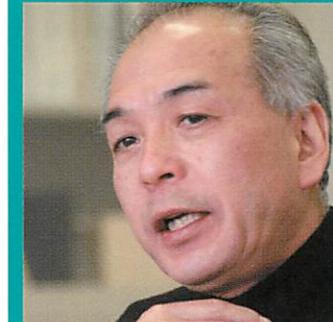
聞き手 見義悦子  
(女性室スタッフ)



河野教明  
(山陽教区 備後組 光圓寺 住職)



近藤龍磨  
(岐阜教区 第11組 廣専寺 住職)



●見義 女性が、住職・僧侶として男性と共に法要に参加する機会が増えています。そこで、声明という感じに聞こえる生活のなかでお感じになっていること、女性と一緒に勤めをする時の工夫などをお聞かせください。よろしくお願いたします。

■近藤 教師修練にスタッフとして15年関わり、声明担当・班担当・フリーなどをやってきました。近年、スタッフに女性が登場し、修練生にも女性が多くなって感じたことは、特に声明については蓮如上人当時の時代状況もあるでしょうが、男性中心としたもので、全く女性のことを考えていないことです。常日頃、男性の気持ちのいい音が、女性の気持ちのいい音に繋がるかということにおいて、非常に疑問を感じておりました。特に同朋唱和ということ、男と女が共に勤めをするなかで男女の声の差を確認しながら探ってきたことが、調声人が男性で男性の気持ちのいい音を少し低くし、反対に調声人が女性で男性が多い場合は、自分のいつもの気持ちのいい音よりも少し高めに聞こえることに気がついたので、こういう場合は基本音

としない方がいいわけですから、修練などでピアノなどを持って行き、「この音でお願いします」と言って、確認しながらやった結果が、今のようなんですね。たかが一音、さほど二音です。真宗門徒が親鸞聖人という人を気にしながら生きていくということがないように、調声する人が部屋の広さや人の構成を考えていく、それが勤めの基本ではないでしょうか。そうすると、ハーモニーとして整ったお勤めができるんじゃないかと常々、感じております。

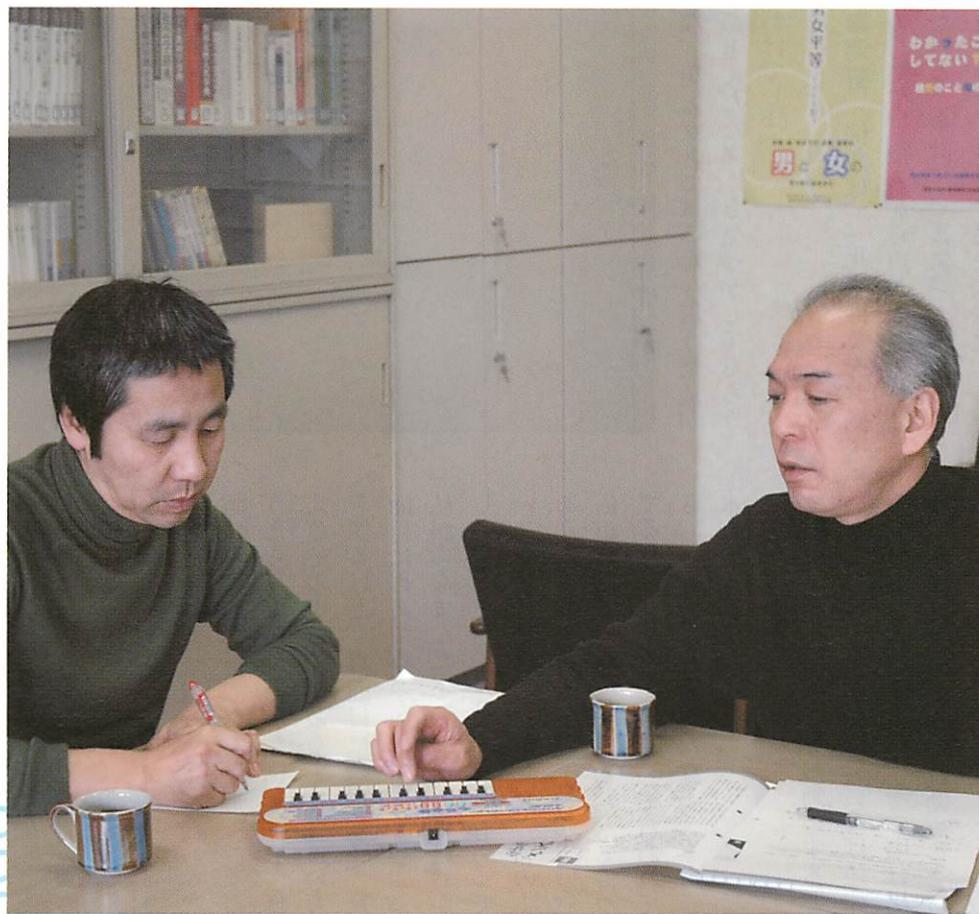
それと、声を出す場合大事なのは姿勢です。上手、下手ではなくて、呼吸法として、『正信偈』でも「四句一息」とか「二句一息」というのが基礎としてありますから、そこを気をつけて出していくと音がぶれないんです。芯がぶれるから声もぶれるんです。例えば、周りの人がその人に合わせる時に芯がぶれたら全体がぶれますから、芯がぶれないような声の出し方が男であろうと女であろうとあるわけです。

男であるから、女であるからとくくりにした見方で声を見ると、それは通用しないんです。男にも男性的な声と女性的な声がありますし、女にも女性的な声も男性的な声もあるからです。

SPECIAL  
FEATURE

■河野 近藤さんがおっしゃったように、男性、女性というふうにくくるとは間違いだと思います。西洋音楽では声の音域による区別で、女性にはソプラノ・メゾソプラノ・アルト、男性はテノール・バリトン・バスに分けています。ソプラノの最高音とバス

の最低音の音域差は、約3オクターブあるんですね。そうすると、そこで男性・女性がそれぞれの声質・音程によって一番出しやすい音をどこにもつていくかというのを考えてみたら、ほとんどないんですよ。結論的に言えば、例えば千人が千人同じ音で『正



信偈』をお勤めするのはちよつと無理なんじゃないかなあとということは思います。これは、私のうがった見方で声の大きい人が勝つてしまっています。つまり、その人に合わせていくしかないという現状ですよ、現実的には。そうすると、そこに声の出せない人たちの戸惑いが空気のなかにあるわけです。例えば「一緒にご唱和してください」と言いながら、唱和できない同朋奉讃。自分自身も改めて考えれば、そういう場の空気を見ないで今までずっとやってきたということがあります。

話は変わりますが、例えば「真宗宗歌」や「恩徳讃」、これも結構戸惑いがあると思います。正式な楽譜どおり歌おうとすれば、私、声が出ないんですよ。私は以前から少し音程を変えて、それを伴奏に使ったりしています。例えば、難波別院で出されたものも少し音程が変えてあり、非常に歌いやすいですね。仏教讃歌にしても声明にしても、あまりにも専門化してしまっているように感じます。同朋教団であるのならば、皆でちゃんとできるような形になればなあと思っております。

ろうとしたことで、具体的に課題になつてきたり、気づいたりされたことはありますか？

■河野 葬儀に向いて、女性と一緒ににお勤めすることがありますが、最近「このぐらゐの音を出していいけど、それで合いそう？」と事前聞いています。そして終わったら「今日、どうやった？声、出しやすかった？」と尋ねるんです。こっちは若干苦しい面もあるんですが、そうやって折り合いをつけながらやれば何とかなるなあ、と。でも、数年前までそんなことさえ意識していませんでした。

●見義 女性たちが入り、一緒にや

■近藤 男の側の言い分ばつかりが、手を振って歩いてきたわけだから、女性が参画することによって男性の意識を変えていくことがあると思います。これは教団に身を置く女性が一番感じてるんだろうけど、「同朋社会の顕現」と言いながら、女性のことを考えたシステムにはなっていないんです。だから、女性の側の声を聞かんことには気づかないんです。人間って鈍感だから。ご信心の問題もそうでしょ。例えば、部落差別の問題や靖国の問題によって今の自分が問われてくるわけです。気づかないもの・見えないものを「あつ！なるほど



な、男と女とはこんな違う構造があるんだなあ」と気づかしてもらわけてしょ。

■河野 例えば、『正信偈』をお勤めして、後ろから声が聞こえてこない、余計にムキになって頑張ろうとします。そうすると余計に声が出てこないんです。つまり疎外感というか、「坊さんがあんなに一生懸命にやられたら、こっちはついていけないわ」みたいなものを後ろにいる人たちは感じてるのかもしれないし、そこらへんをもうちょっと何とかできんかなあ……て思います。

■近藤 おばあさんと嫁さんと3人で夕方にお勤めする時、僕がお勤めを始めようとすると、「なまんだぶ、なまんだぶ……」って取って付けたような念仏を後ろで言うわけ。終わった時に「真面目にやらんか！」って言うたら、妻が「あんたは、念仏を称えるその声に差があるような言い方をするけど、真面目に調声して、真面目に称えてるあんたの方が立派で、私が「なまんだぶ」っていうのはおかしいってこと？それって低いものっていうような見方で、おかしいやないの！あんたより大谷大学の学長先生の念仏が尊くて、あんたのはあかなくて言ってるみたいなもんやで」って言われてさ、一本取られましたな。一本も二本も取られました。

■河野 『正信偈』をお勤めするということ、大きっぱに言えば蓮如上人以降からですよ。その頃は男性・女性はどのようにお勤めしていたんでしょう。日本にはハーマニーの文化はないですよ。手拍子を打って音程がどうこうじゃなく、皆が同じ歌を歌うという文化ですよ。同朋奉讃ができた時の願いというのは、皆が一緒にお勤めできるようにということだったと思うんです。『正信偈』でも私らの地方ではちよつと癖が入っ

ているんです。広島県ですからお西の盛んな地域で、私の村ではお西の人もお東の人と一緒に勤めをするという場がすごく多いんです。そういう場合に、地域独特の洵のない『正信偈』のお勤めがあったんです。皆で『正信偈』を同じように声を出すというだけなんです。私は個人的には皆が同じことをきつちり合わせるというのは好みじゃないですね。そうせんと、「私、音痴だから」と言う人が参加しにくいからです。

■近藤 僕は准堂衆じゅんどうしゅうだけど、「もう声明が好きで好きでたまらん」という人はいます。それはそれでいいんです。言いたいのは基本形というのがあり、それがしつかりしていれば、軸・芯がぶれないようになるんです。自転車じゆうせんがそうよ。子どもに自転車を教えるでしょ。最初は足元を見たり、ハンドルを見たりしているからできないですよ。背筋を伸ばして遠くを見て、「さっ！こいでみ！」って言うのと、できるんです。基本形ができればスタートできるわけ。あとは反復することによって上手になるんです。和讃でも「弥陀成仏」を覚えたら、ほとんどの和讃ができるわけ。だから、軸を、芯をぶれないようにもって、人生でもそうやと思うわけ。信心の

軸は「ただ念仏すべし」でしょ。その軸は何かという親鸞聖人っていう人をずつと意識しながら生きていくということだと思っんです。

●見義 あなたにとつての声明って何ですか。

■河野 声明に対するリスペクト（尊敬、敬意）ということでは、広島で被爆50周年の法要をした時に、山陽教区の若手が一所懸命に練習して法要のお勤めをしました。そのお勤めを聞いたご門徒さんがものすごく感動されたんですよ。それが大谷派の伝統声明の大事な部分だと思っんですよ。そういう意味での声明っていうものは大事だと思っんです。ただ、私たちが今、ここで模索しているのは





そうじゃない声明ですよ。皆で『正信偈』をお勤めする場合は、そこをどうしていくか、どう折り合いをつけていくのかという、そのところではもう少し緩やかな声明という方向性を探っていく必要があると思うんですけど。今までの伝統声明と反発し合うんじゃないかと、お互いが折り合いをつけながら、いいものを見つけれられると思うんです。

■近藤 本山・別院では伝統に則ってきちつと朝夕のお勤めがされています。そこは絶対に崩したらあかんと思います。本山の伝統声明が500年の

風雪に耐えてきたのはそれなりの重さがあるんです。そこでお勤めしながら思うけど、やっぱりそれはそれなりにいろんな人たちに感動させてきた歴史があるわけです。「形だけやん」っていうふうな人たちもおるけど、その形。僕さつきも言うたように、基本形という帰れる場所を持つとかないとあかんと思うんです。そのうえで、例えば親鸞聖人は和讃を七語調という当時の流行歌に乗せられた。一つの宗教改革ですよ。蓮如上人はそれに節を付けて、皆で歌ったわけです。ならば、今の時代に我々がどういう声明をするかということを抜本的に考え直してもいいような気はしますね。

●見義 河野さんは、山陽教区が女性室公開講座を行なった時の委員長でしたが、男女平等参画ということ、ご自身にとっては、すんなり受け入れられることだったんですか。

■河野 男性社会のなかで生きてきますから、男性がこれで当たり前なんだというようなものが、だいぶ意識のなかに入ってきてます。そこらへんをいろいろな形で連れ合いから気づかされるということはあります。ただ、基本的には「俺について来い」というパートナーシップじゃないんで

す。よろしくお願いしますっていう関係。私は、プライベートで言えば、彼女のパートナーとして音楽をやってきました。彼女が歌を歌い、それに私がハーモニーを付けるという役割、伴奏者なんです。

■近藤 一口に教団といつても女性がいって男性がいます。つまり、坊さんの世界でいえば女のお坊さんがいて男のお坊さんがいて、門徒の人のなかにも在家の男の人がいて在家の女の人がいってという構成のなかでやっていきます。そのなかでまず、男が女の人のことを分かるうとするには女の人の声を聞かん限りは分かりません。女の人も、男はどういうふうを考える生き物かを理解する時には、男の人の声を聞いたたり、そういうふうな関わりをなかでしか分かりません。「俺は俺らやけん！」とやうてしもうたら、そこにはもう関わり合いを持つとうとは思わんことになります。つまりは、相手を一人の人間としてどう見るかということやと思ひますね。

●見義 今回は声明ということを手がかりにお話いただきました。まず、一人の人として尊重して相手の声を聞くこと。そこから、それまで見えていなかったことに気づかされていく

のだということをおつしやっていたできました。また、くしくもお二人の口から「女であるから、男であるからとひとくりにできない」という言葉を聞きました。この言葉は様々な関係を開くキーワードであると思います。そのことに気づいたお二人の



現実生活はきつと共に生きる相手を意識しつづけ、相手の声を聞きつづけて、あらたに出会いなおしているのではないかと推察しました。「同朋唱和」の願いとは、関係存在としてある私たちの生きる姿勢の根っこ、相手と関わりつづけ、意識しつづけ、声を聞きつづけて、あらたに出会いつづける生活が願われるところから起こされた真宗門徒の生活習慣なのかもしれないと改めて気づかされた対談となりました。男と女がハーモニーを奏するような「男女両性で形づくる教団」が創られていくことを願います。ありがとうございました。■

〈報告1〉

# 男女両性で 形づくる教団 をめざす協議会



REPORT1

■ 企画会議などは、どのような人選が行なわれているのか曖昧である。広くたくさんの方の意見が反映されるよう心がけてほしい。

## 1 御遠忌の企画検討のあり方について

■ 先の蓮如上人五百回御遠忌では、企画ができてから、女性の団体（坊守会など）にお茶の接待などの協力を依頼することが多く、企画の段階から女性が入っていたケースは少ない。今後の御遠忌に向けては企画・決定の段階から女性が参画するようにすべきであり、また、半数を女性にするなど、宗務行政の側からある程度の強制力を持つて、積極的に女性の登用を促す施策が必要である。

2006年10月4日、宗務所において「男女両性で形づくる教団をめざす協議会」を開催しました。協議会には、これまで女性室公開講座を開催した教区と、すでに女性小委員会など女性室の課題を共有する委員会を持つ13教区から男女各1名、計26名の出席がありました。教区の活動報告や課題について話し合われた他に、「男女両性で形づくる御遠忌とは？」というテーマで本山及び教区で行われた蓮如上人五百回御遠忌における女性の参加状況や問題点、さらにそれを踏まえて宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けた今後の課題等が話し合われました。そのなかで出された意見や提起を報告します。

## 各教区の取り組み

### 奥羽教区

#### [男女共同参画推進実行委員会]

- ・公開講座 2006年 12月4日  
テーマ「宗門における女性の位置付けについて」  
講師 望月慶子さん
- ・機関紙発行 (年1回)

### 三条教区

#### [企画委員会]

- ・共にといえる人生講座 2007年 4月15日  
テーマ「真宗の人間観  
～男と女が共に平等な関係を生きては～」  
講師 太田清史さん
- ・共にといえる人生講座開催に向けたスタッフ学習会 (3回)

### 金沢教区

#### [女性小委員会]

- ・公開講座 2006年 10月26日  
テーマ「宗門における男女共同参画について」  
講師 望月慶子さん
- ・公開講座 2007年 3月9日  
テーマ「これでいいの?私の子育て」  
講師 広岡守穂さん
- ・自主学習会

### 名古屋教区

#### [組織教化部門]

- ・女性研修 (年7回 3年計画最終年度)  
テーマ「宗祖親鸞聖人に学ぶ」  
講師 四衛亮さん

### 四国教区

#### [男女共同参画班]

- ・公開講座 2006年 11月1日  
テーマ「巡回バスを走らせた主婦」  
講師 宮本美枝子さん
- ・公開講座 2007年 5月11日  
テーマ「女性が語る仏法一住職と坊守」  
講師 岩佐幾代さん

### 久留米教区

#### [男なり女なり委員会]

- ・公開講座 2007年 5月11日  
テーマ「男のくせに!女のくせに!～男と女という視点から～」  
講師 園田久子さん
- ・一泊研修 2006年 11月16日～17日  
テーマ「これからのお寺～男と女という視点から～」  
講師 楯泰也さん
- ・輪読会 前年度の公開講座 講師 梶原敬一さんの講義録を輪読

### 仙台教区

#### [女性小委員会]

- ・教化委員会学習会 2006年 8月30日  
テーマ「男女両性で形づくる教団をめざして」  
講師 旦保立子さん
- ・平座で話そう!押しかけ座談会 2007年 4月19日  
会津組で開催

### 高田教区

#### [えん(縁・円・炎)の会]

- ・女性室公開講座高田会場 2007年 6月8日  
テーマ「男と女のつながりの中から  
～恵信尼と親鸞の生き方に学ぶ～」  
講師 梶原敬一さん

### 富山教区

#### [あいあう会]

- ・公開講座 2007年 6月7日  
テーマ「女たち男たちの「私」さがし  
～女性史からみえてくる現在の男女～」  
講師 園田久子さん
- ・学習会 (月1回)
- ・公開講座講義録発行

### 高山教区

#### [組織拡充小委員会]

- ・男女両性で宗門を考える研修会 2007年 4月20日  
テーマ「男女両性で宗門を考える」  
講師 望月慶子さん

### 大阪教区

#### [男女平等参画を考える会実行委員会]

- ・中世、近世、近代の女性・坊守に関する資料収集

### 山陽教区

#### [男女共同参画推進のための推進委員会]

- ・推進委員会にて今後の取り組みについて協議中

### 日豊教区

#### [時代社会部門]

- ・スタッフ学習会 (年3回)
- ・女性室との交流学習会 2007年 3月1日  
テーマ「自由と安心と自信を生きたい講座です」  
講師 本多祐徹さん

■ 声明に関していえば、これまでの声明は男性を想定して作られてきたといえる。今後男女と一緒に法要を行う場合、男声あるいは女声の二つの音にみんなが合わせるのは無理があるので、ハーモニーを取り入れるなど新しい声明を創っていくことも考えられなければならない。

■ 先の蓮如上人五百回御遠忌では、女性のみが内陣出仕をする一座をもうけた教区もあり、それ以後少しずつ報恩講などに女性が出仕するようになってきた。しかし、女性だけの法要や女性同朋大会など「女性枠」としての限定されたあり方は男女両性で共にという願いにかなっていないのではないか。

■ 御遠忌法要を勤修するにあたり、同朋唱和ということから僧侶と門徒という視点に併せて、男性と女性が共に法要を勤めることの意味とあり方を考えなくてはならない。

## 2 法要儀式について



## 3 教学教化に関する施策について

■ 「女性の視点」ということが言われるが、御遠忌を機に、女性の教学ということ、例えば女性の視点で『大経』の第三十五願をどのように読み解くかということについて取り組むべきである。

■ 制度上の問題と同時に、女性が得度受式や教師資格を取得することに、周囲の理解を得られないことが多いため、制度面と意識面とを整理して女性の参画を積極的に促すべきである。

■ 真宗学院などの設置に教区間の格差があり、教師資格を取得するにあたり女性が参加しにくい現状がある。通信教育制を取り入れるなど積極的な対策を願う。



■ 帰敬式実践運動が進められていることから、坊守について検討する場を設けて、坊守の位置づけを明確にすべきである。

■ 「寺院教会条例」第二十条二項については早急に削除の方向を示すべきである。

■ 教団内のコンセンサスが得られていないという消極的な姿勢でなく、しっかりとした願いを持って坊守に関する制度改革を急いでもらいたい。

■ 女性室に常勤スタッフを置くべきである。

## 4 坊守について

## 5 その他

■ 高廊下の法語なども女性が選定したものをいれるとか、女性の書いた本などからも選ぶなどいろんな可能性を考えるべきである。

■ 門徒を対象にした御遠忌ではコップの中の御遠忌ということになる。そうではなく市民全体に目を向けた御遠忌でなくてはいけない。

■ 同朋会館のリニューアルが予定されているが、女性の設計士を採用するなどして、男性と違った視点を取り入れるべきである。



# 「要望書」の提出について

REPORT2

女性室ではこのたびの柳澤厚生労働大臣による発言について、女性たちの主体的な生き方を阻む重大な問題であり、悲しみと怒りをもって受け止めました。そして、この発言は男女平等社会の実現を願ううえで決して見過ごしてはならないとの判断のもと、所管部署である解放運動推進本部（安藤伝融本部長）から安倍首相と柳澤大臣に対し「要望書」を別掲のとおり提出しました。

この発言を耳にした時、みなさんほどのように感じられたでしょうか。もしかすると「またか」と思ったかもしれません。なぜなら「女性が生殖能力を失っても生きているのは無駄で罪です」（石原慎太郎都知事・二〇〇一年）、「子どもを一人も産まず自

由を謳歌して楽しんでいる女性が年をとってから納税者に自分を支えるように要求するのはおかしい」（森喜朗元首相・二〇〇三年）など、今までにも似たような発言が行政の責任者からなされてきたからです。またなかには「機械という喩えは適切ではないけれど、女性が子どもを産むのは当たり前のことだから、ことさら目くじらを立てなくてもいいのではないか」と思った人がいるかもしれません。いずれにせよ、このたびの大臣の発言をどのように受け止めるかは、私たちが女性と男性の関係は今までのように生きてきたか、また今後どのように生きていきたいのかに深く関わっているのです。

あつて、国が介入すべきではありません。ましてや子どもが二人以上いる家庭をもつことが「健全」な考え方だ、とすることは誰にも言えないことです。これまで女性は結婚し、子どもを産み育てることが一番の幸せだと思われてきました。けれども今、女性たちが望んでいるのはまず一人の「人間」として生きることであり、縁があれば「母」として生きることも大切にしたいということではないかと思えます。

私たちは一人ひとりが代わることでできないかけがえのない存在であり、お互いが関係を生きる存在であるというのを教えられています。この発言をきっかけに、あらためて「女性」と「男性」の關係に目を向けていきたいと思えます。

●柳澤伯夫厚生労働大臣の女性を子供を産む機械や装置に例えた発言と、若い人たちが「結婚し、子どもを2人以上持ちたいという健全な状況にある」との発言に対し、安倍晋三首相と柳澤大臣に当派解放運動推進本部長名で要望書を提出しました。

内閣総理大臣(男女共同参画推進本部長) 安倍 晋三 様  
厚生労働大臣 柳澤 伯夫 様

### 男女平等参画社会の実現に向けた要望書

柳澤伯夫厚生労働大臣におかれては、さる1月27日、女性を子どもを産む「機械」や「装置」に例えた発言をされ、さらには、2月6日の会見でも、若い人たちが「結婚し、子どもを2人以上持ちたいという健全な状況にある」と発言されました。

私たち真宗大谷派は、性差別を克服し「男女両性で形づくる教団」の実現を目的に女性室を設置して10年になります。教団として克服すべき問題は山積しておりますが、これまでの歩みの中で明らかとなった課題は、男女が平等に社会に参画して行くことの大切さであります。この取り組みの中から、ご本人にとどまらず今を生きる私たち一人ひとりが、このたびの発言のもつ意味を考えなければならないという認識のもと、意見を表明します。

仏教は、私たち一人ひとりが、かけがえのない尊いいのちを賜って生きていることを教えています。しかし、私たちは、これまで経済を社会の中心に据え、効率のよさを追い求めたことによって、いのちの誕生を人間の機能としてのみとらえ、いのちを私有化し、優劣を付け、操作しようとしてきました。このことは、深く懺悔しなければなりません。

もとより、このたびの発言は、意図的に女性を侮辱しようとしたものでなかったことは、本人が釈明、謝罪されているとおりです。しかし、だからこそそこには深刻な問題が存在しているのではないのでしょうか。

まず、少子化問題の原因を、女性が子どもを産まなくなったからと、短絡的に捉えています。しかし、安心して子どもを産み育てられない社会にこそ、少子化の原因があるのです。今の社会が安心して子どもを産もうとする環境にないことを、女性たちは無言のうちに訴えているのです。いのちを社会や国の都合によって問題化し、さらには、「いのちの誕生」を女性に押し付けてはなりません。先の大戦時、「産めよ増やせよ」と女性たちに圧力をかけ、若者たちを戦場に送り出したことと同様の過ち、全てに国家を優先するという過ちを決して繰り返してはなりません。

次に、二度目の発言は、既婚者に対して「子どもはまだ?」と何気なく聞くことと同じように、結婚を選ばない若者や、さまざまな理由で子どもに恵まれなかった夫婦を傷つける発言であります。結婚や出産はきわめて私的な問題であり、国や社会が決して介入してはなりません。女性は出産することができますが、その事だけが女性の生き方のすべてではありません。

さらに、出産や育児を男女ともに担うことにおいて親と子が共に育っていく環境を整えるべきであります。いまだにそれは女性の役割という認識が根強い上に、男性は依然育児に関わりにくい労働環境があります。男女とも安心して子どもを育てられる環境を整え、「男女共同参画」をもっと身近な家庭から始める必要が今こそ求められています。

以上、今回の発言が内包する問題の重大性を真摯にうけとめていただき、男女が共に豊かに生きられる社会の実現に向かって、なお一層取り組みが進められますようお願いするものであります。

2007年2月9日

真宗大谷派解放運動推進本部長 安藤 伝融

## 「心遣い」

はたかなみ  
秦加奈弥

大阪教区第一組祐泉寺

私が以前勤めていた職場でこんな声を耳にしたのを覚えています。「この前に行ったお葬式で住職の隣に女のお坊さんが座ってたんだけど、女の坊さんのお経の音がカン高くて違和感があった」と。この言葉は、女性である事への違和感ではなく、女性の声に対する違和感を指摘したもので、正直少しショックでした。

多くの女性住職や女性教師の方が活躍されている今、私も教師資格取得のために大阪真宗学院に入学すると、半数以上が女性でした。教師修練の場でも女性は多く、男女平等を感じる中、どうしても気になるのが声明しょうめいでした。人数が多いとはいえず、声明は男性の音程で行われ、女性はその1オクターブ上で声を出す事になります。声明はハモッてはいけないので、音階が上がる度に女性の高音が響き、荘厳さも消え、何より音程を保つことで私は精一杯。時に、「女性が多いので女性の高さでやってみましょう」とおっしゃる声明の先生もおられますが、男性達

が低く辛そうに発声しているのを見ると申し訳ない気持ちさえおきます。一人でお念仏する時は感じない、「合わせる」事の大変さ。

去年、組内のお寺の報恩講に出仕させて頂く機会がありました。そして新米の私に内陣出仕のお役目も頂き、失敗しながらも勉強できた事、何よりこのように女性を受け入れる考えの広がりを実感できたことを嬉しく感じました。そこで出仕されていた方に「女性は声を合わせるのが大変でしょう」と話されました。女性が多くなってきたと言っても、やはり実際の法要などでは男性に声を合わせなければならない場合が多いのです。気を使われて女性が合わされても何か違和感を感じ、かといって女性が多い場合、少数派となった男性はこれまた肩身の狭い思いをされる事でしょう。

男女平等とはいえ、身体的な差異、又は個々の持つ声の差を、声明という場で合わせる事は結構大変だと私は感じています。しかしそれ

と同時に、お互い「女性が居るから」「男性が居るから」と考えながら声明する、その心遣いが少し嬉しくもあるのです。それぞれの声の高さを生かした合唱は大変美しいものです。声明がそうあれば良いとも思います。けれども、老若男女が一つの音程にあわせる意味も、考えて行きたいと今は思うのです。

〈エッセイ〉  
女の  
ささやき



# 「話し合い、聴き合い」

Essay

しん ら なお ふみ

新羅 尚史

山形教区第4組緑陰寺

私に関わっている山形教区の青少年小委員会の事業として、カウンセリング講座が2007年3月から3回にわたり、地元の臨床心理士の方に出講して頂き『耳を傾ける～ていねいに聴いてみよう～』ということを中心に、開催されることになりました。現在、青少年の大きな問題の一つでもある「引きこもり・ニート」の問題から講座を開いていこうというのが始まりでした。しかし会議を重ねていくに連れて、向かい合っている筈の相手の声や話を私たちは普段どれだけ聴くということができているのだろうか?ということが問いとして出てきました。

これは子どもと大人という関係だけではなく、男性と女性ということにも言えるのではないのかと思います。自分との違いを見つけると、認め合うより以前に拒否をし、壁を造り上げていく関係の方が多いのではないのでしょうか。もっと問題になるのは認め合うフリをして風通しはある程度は良く、姿は見えるけど最後の最後は通さない網戸を造ることなのかとも知れません。ですから、本当に会うという意味においても話し合い、聴き合うということが大切になっていくのではないのでしょうか。

話は変わりますが、今から10数年前にある女性の方から相談されたことがありました。その話の途中で「君は男を捨てているから何でも話せる」と言われました。まだ僧侶にもなっておらず、真宗や性差別についても学んでなかったのに、その言葉に対して深く考えることもなく「男を捨てているつもりはないんだけどな」と、その時は思っただけでした。ただ、ずっと頭の片隅にその言葉が残っており、この原稿を書くに当たって「どういうことだったんだろう?」とは思ったものの、その方とは会う機会が無くなり言葉の真意を確かめることが出来なかったのに、友人の女性に「どう思う?」と聞いてみました。答えは「捨てているかどうかはわからないけど、まあ話しやすいとは思うよ」でした…。

今になって思うことは、男を捨てていると思えるような相手でなければ相談することも出来ないような程の痛みだったのではないだろうか。そのことが私にとって初めて性差別ということを重ね考えさせられたことでもありました。

さて、あれから10数年経った私を見て、今でも捨てているように映るのだろうか。

〈エッセイ〉

男のつぶやき



## 『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典一五九頁】という言葉から名づけられました。

「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしても出遇いのよろこびが表わされているのでしょう。

日々の生活にあつて、わたしたちが、“生きる”ということを考えてとき、それは、いろいろな人と声をかけあつてこそ、“生きる”ということがなりたつていくといつても過言ではありませぬ。しかし、時にその声が届かなかつたり、行き違つたり、そのためにいろいろな出会いをしているながら、まわりの人を見失つているのではないのでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことよつて、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思ひます。

## 女性室活動報告

### 【スタッフ派遣】

〈2006年〉

12月4日 女性室公開講座 高田会場 事前スタッフ会への参加

12月11日 女性室公開講座 福井会場 事前スタッフ会への参加

〈2007年〉

1月17日 女性室公開講座 福井会場 事前スタッフ会への参加

1月18日 三条教区「共にといえる人生講座」スタッフ学習会への参加

2月7日 女性室公開講座 福井会場 事前スタッフ会への参加

2月14日 女性室公開講座 高田会場 事前スタッフ会への参加

2月21日 三条教区「共にといえる人生講座」スタッフ学習会への参加

3月1日 三条教区「共にといえる人生講座」スタッフ学習会への参加

3月1日 日豊教区「女性室との交流学習会」への参加

3月1日 女性室公開講座 福井会場 事前スタッフ会への参加

3月18日 女性室公開講座 高田会場 事前スタッフ会への参加

4月13日 女性室公開講座 福井会場 事前スタッフ会への参加

4月17日 山形教区 女性室公開講座開催に向けた

実行委員会への参加

4月20日 女性室公開講座 高田会場 事前スタッフ会への参加

5月30日 女性室公開講座 高田会場 事前スタッフ会への参加

### 【公開講座】

5月26日 女性室公開講座福井会場

会場：福井東別院

講師：味沢道明さん

テーマ：本当の男女共生とは

—思い込みからの解放—

6月9日 女性室公開講座高田会場

会場：高田教務所

講師：梶原敬一さん

テーマ：男と女のつながりの中から

—恵信尼と親鸞の生き方に学ぶ—

### 【第8回女性会議】

6月25日～26日

会場：宗務所3階 第4・5会議室

講師：福島栄寿さん

テーマ：真宗と人権

## 編集後記

the editor's notes

◆今回は対談でお二人の男性に声明をおして日ごろ感じておられることを聞かせていただきました。生活のなかでそれぞれが、一人ひとりを尊重して相手の声を聞くこと、そこから見えていなかったことに気づかされていくのだということをおため感じたことですよ。

最近、各地で地震が発生し、被害に遇われた方々にはお見舞い申し上げます。

先日、本山奉仕として、災害支援を考える研修会があり、参加しましたところ、そこで、被災者のおひとりと言われたことが心に残りました。それは、「ボランティアという言葉は好きではないが、助つ人として最後のひとりまで寄り添っていくことが、そして、ていねいに関係性を生かせることがボランティアなのではないか。」という言葉でした。

この「メンズあいあう」も男女両性で形つくる教団をめざして、ていねいに、男・女の関係性をしっかりと生かしていける視線を持ち続けていきたいと考えています。

お感じになったこと、ご意見、ご感想などお聞かせ下さい。  
(巨津善祐)

◆5月11日に第1回宗務審議会「坊守の位置付けに関する委員会（委員17人）」が開催されました。これまでさまざまな方面からその行方が懸案されていた問題です。ようやく趣上に乗せられた今、これまでの教団での論議を念頭におき、より深く広い論議になることを願って関わっていききたいと思ひます。  
(見義悦子)